

「長岡空襲」の体験を次の世代に……

河合靖久

一、長岡空襲への想い

戦後六五年を迎えた今年の八月は、連日三十度を超える暑さと共に、若い世代に平和へのバトンを引き継ぐ課題が論じられた年だと思えます。

国連事務総長も、広島・長崎を訪れ「子どもたちにも正しい道、つまり、軍縮を通じて平和へと至る道を教えようではありませんか……」と呼びかけています。核保有国の大使も広島・長崎の平和記念・祈念式典に初参加です（広島は記念。長崎は祈念。米大使は広島のみ出席）。

新潟県下で唯一の空襲被災都市の長岡市では、例年八月一日を中心に戦災の慰霊と復興を祈念した催しが

行われています。

「長岡空襲から65年」欄（市政だより特集）より）

「8月1日の催し」（午前六時〜夜十時三十分過ぎまで）

○ 非核平和都市宣言市民の集い（平和の森公園）

○ 戦災殉難者慰霊祭（平潟公園）

○ 早朝墓前供養（昌福寺）

○ 市民におくる映画の集い（中島コミュニティセンター）

○ 柿川灯ろう流し（柿川）

○ 慰霊花火と梵鐘の打ち鳴らし（信濃川・市内各寺院）

○ 鎮魂たむけの花（市民センター）

○ ながおか平和フォーラム（リリックホール）

（長岡まつりは慰霊と復興のため、空襲の翌年「戦災復興祭」として復活。八月一日は慰霊中心の行事が多い）

被災者の「花火の音が焼夷弾の体験と重なり、耐えられない」とのお話もあるのですが、近年、鎮魂と追悼の「白い花火」を空襲の開始時刻、夜十時三十分に分ち上げ、市内の寺院では梵鐘が鳴らされています。

尚、この空襲で「長岡は焼け野原となり、一四八〇名もの尊い生命が失われました」（空襲を語り継ぐ集い）（長岡市は、今でも新たな犠牲者が判明し人数が増えている。昭和59年戦災復興四十周年「非核平和都市」を宣言、昭和61年から毎年「広島平和記念式典」に中学生を派遣している。県内では、新潟市等も中学生を派遣。福島・郡山市では、広島・長崎に分けて派遣している）

私がこれまでに話を聞いた人たちの「戦争は嫌だ、平和は大切だ」との願いは同じですが、その人の居た場所や立場で、空襲体験談も少しずつ違っていきます。

・空襲警報で校舎防護のために駆けつけた。近くの民家まで火の手が迫り、学校に辿り着くのは容易ではなかった。（小千谷から長岡中学（現長岡高校）に通った男子生徒）

・長岡の町が燃えるのを村の峠から震えながら見ていた。（女子師範卒業後、小学校に赴任した教師）

・手を引いての避難中に、焼夷弾が義母を直撃した。（教員住宅の賄いのおばさん）

・翌朝炊き出しの握り飯を持って、親戚の家を探し歩いた。（栃尾の男性）

・罹災者には悪いけど、花火のように綺麗に見えた。（見附の教え子の祖母）との証言もあります。

終戦間近に生まれた私（当時二才）には、長岡空襲の直接の記憶はありません。母の背に負ぶわれ、東の赤く焼けた空を浜から見たそうです。「焼けたトタンが降ってきた」と、母から聞きました。（寺泊）

二、ながおか平和フォーラムに参加して

第一部 長岡空襲紙芝居「思い出の記」に続き、第二部 く長岡空襲を語り継ぐためにくの壇上に、広島派遣中学生の経験を持つ中く高校生の三名の若者が、討議に加わったことが、今年の特色だと思えました。

「この地で起こった歴史を次代に語り継ぐ若い世代の育成が急務……」との主催者の意図が、明確に示された好企画でした。未来への希望の灯を見た思いで、これからのさらなる発展を期待します。

第三部で講演の後藤文雄さんは、長岡の実家がお寺のカトリックの神父さんです。カンボジア難民の里子を育てたことから、カンボジアの辺境地に小学校建設

を開始し、平成十八年に長岡の米百俵賞も受け、平成二十年には、一四校目が開校しました。

・「私は八月が近づくと、無意識のうちに身体が重く、外出もできない…というトラウマに最近気がついた」

・「そもそも戦争は、きちがい沙汰」で、戦時中、中学生だった自分も「外国人捕虜の乗ったトラックに石を投げたことがある」と話されました。

・マレーシアで「いまだに日本人は許せない」と言う人に出会い「戦争責任が、私たちにもあるのではないか…と考えるようになった」。

・友人の中に、強制連行されて過酷な労働で亡くなった朝鮮・中国の人々のお骨を集めて祖国に送り届ける活動をしている人がいる。(直接の加害者でないのに…)

・私たちには、自分の受けた被害者意識は残るが、加害者でもあったことを忘れてはいないだろうか。

・自分たちに都合の悪いことも、事実は事実として認めなければいけないのではないだろうか。

・「そもそもこちらが仕掛けた戦争で、近隣の国の多くの人々を傷つけてしまった現実を、うっかりすると忘れてしまいそうです」

被害体験と、加害の事実の認識が、バトンを若い世

代に引き継ぐための「カギ」ではないかと考えました。後藤さんは、ヴァイツゼッカー・ドイツ連邦大統領の「過去に眼を閉ざす者は、未来に対してもやはり盲目となる」の演説も例に私たちに話しました。

また、長岡空襲が、司令官カーチス・ルメイ自身の昇進と、陸軍航空隊発足記念日を祝う目的だったことにも触れ、戦争の狂気性・今に続く苦しみや、悲しみは許すことができないと訴え、平和憲法の大切さについても熱く語りました(水戸・八王子・長岡・富山の同日空襲は、一日の弾薬量がノルマンディー上陸作戦を上回るよう計算された、戦略上意味のない、最大規模の地方都市攻撃だった)。

三、長岡戦災資料館を訪問して

戦災資料館(平成15年開館)は、被災体験の語り部の方々も事前の問い合わせで対応してください。

戦時中の様子や日用品等の展示、体験者から募集した長岡空襲体験画、殉難者遺影展、焼失した家屋を丹念に地図に記録した焼失地図展、長岡空襲を語り継ぐ集い、親子長岡空襲史跡巡りなど多彩な活動です。

古田島館長さんからお話を伺いました。

「来館者の小・中学生は少しずつ増加し、年間三千名を超えるようになり…クラスや学年単位で、九十分くらいを目途に案内」しており「人数・学年に合わせた語り部のセッティングや、発達段階に合わせた説明に工夫が必要です。小学三年生などには、実際に防空頭巾をかぶり、防火用水などの実物に触れる体感と、ボランティアの生の体験談を大切にしています」。

「中学生ともなると、若者らしい真剣さで鋭い質問もあって、常に勉強が欠かせない…」等々、貴重な話を伺いました。

二十数名のボランティアの熱意とがんばりに助けられているとのことですが、高齢化するボランティアにとっても、次の世代の育成が大事な課題との事です。

館を参観後の教師が、次の学年や学校でも見学を勧めてくれることが、見学者増加の要因の一つではないかと分析。現在の、学校現場のゆとりのない忙しさにも心を曇らせておられました。

対談後、子どもたちの感想文を読ませてもらいました。生の資料と具体的な体験談は、子どもたちの内面まで届いていると読み取れました。

「…たった一〇〇分で多くの犠牲者が…自分と同じ

歳の子たち…もうこのような空襲や苦しい思いを…過去の時代をふり返り…犠牲者を出さない、こんなことをこれから考えて、生きたいです」（小六男子感想より）
地道でも平和を次代に引き継ぐ足音を感じました。
資料館の外側からは、「長岡空襲前の街並みと建物」と「焦土と化した市街地」の写真や、無差別じゅうたん爆撃等の体験画などの展示も見ることが出来ます。

四、次の世代に平和のバトンを引き継ぐために

資料館引率後の教師の感想に、山本五十六の言葉に感動し、自己の教育態度を反省する文面がありました。
近くの山本五十六（平成11年開館）と河井継之助（平成18年開館）の記念館を合わせて見学する学校もあります。

この戦災資料館と河井・山本記念館の見学のセットは、平和のバトンの引き継ぎの視点から、教育課程・教材論、発達・認識論等からの「相乗・相殺」両面からの効果の検証が必要ではないでしょうか。

幕末の長岡藩・河井継之助と、日米開戦・真珠湾攻撃の責任者山本五十六は、勝機の少ない戦いに反対しながら、戦争の先頭に立たされた悲劇的な指揮官とし

て、地元・長岡のみならず「英雄視」するファンも多いのです。両記念館とも、個人の業績・人柄を顕彰する施設で、見解の相違や論争のある資料は、展示しないのは当然です。しかし、河井記念館で、喜々としてガトリング砲を操作し、山本記念館で、長官機の翼に目を輝かせる子どもたちを見て考えてしまいます。

- ・武器や兵器類は、最新技術でどんなにかっこよくても「大量の人や物を破壊する道具」であること。
 - ・武器の性質は、原則、使い捨てであること。常に次の「優れた」兵器が求められること。
 - ・戦艦・航空機・爆弾ミサイル等の売買は、膨大な国の予算を使い「取りはぐれない儲かる商売」です。それを扱う「死の商人」は、軍人・政治家・官僚を操り「儲かる戦争」を画策すること。
 - ・大きな力で国の方向が決まると、良心や感情・思想などを踏みにじられ、個人の幸せな生活は失われること。
- などの事実を、各世代の成長に合わせて伝えなければならぬと思っています。

話は変わりますが、高校野球の観戦時には、自分の内なる地域ナシヨナリズムを感じます。だれもが地域を愛し、地域の活性化を望んでいます。

だからこそ、自分にとって不利な材料、好まない事柄からも目を背けず、事実や言葉で共通の認識への高

まりが欲しいと思うのです。

長岡高校の記念資料館と阪之上小学校の伝統館も訪問しました。肖像画・銅像や質実剛健や常在戦場の掛け軸や軍服、プロペラ、書物・写真などの展示です。

「紀元2670年」の年号入りの神社のカレンダー（長岡高等学校同窓会記念資料館）は論外として、両校とも河井・山本両者の資料が豊富です。他の資料も含め解説も控えめで、二つの戦争に対する評価の微妙さが伺えます。制約もあるのですが、戦前・戦中の資料展示をそのまま引き継いだ印象も受けました。

長岡藩の「常在戦場」は地域のイベント毎に、長岡駅前大手通りにはためきます。

「長岡市出身の山本五十六：平和を願う気持ちは両市とも」とホノルル市との平和交流も始まっています。今年「五十六祭り」も大手通で催されました。

戦争や空襲などの悲惨さを知り、平和の大切さを伝え追求することは、いつでも、どこでも、だれにでも大切なことです。宇宙船地球号の乗組員として、人間らしく生きるために共通の課題に向かい合いたいと思っています。

（かわい やすひさ・所員）